〔2021 年度学部等教育研究補助金等報告〕

持続可能な社会の担い手を育むシティズンシップ教育の可能性
～SOHUM「アースミュージアム」プロジェクト報告～

岩本 泰*1・近藤 真由*2・梶井 龍太郎*2
室田 憲一*1・木下 理仁*3・二ノ宮リムさち*4

1．はじめに
2．SOHUM「アースミュージアム」プロジェクト 2021 年度報告
3．シティズンシップ教育考
4．おわりに
5．謝辞

1．はじめに

私たちは、環境、貧困、人口、健康、食料の確保、民主主義、人権、平和などの持続不可能な現実の社会状況に直面している。この状況を単に理解するだけでなく、積極的に変革しようとするエンパワーメント、具体的な行動を育成する教育が求められている。民主的な理念に従って、公正で持続可能な社会を築き発展させていく主体である「市民」を育成することが喫緊の教育課題である。これは、「市民（性）教育（citizenship　education）」として、民主主義社会の価値を有する欧米にて先進的に試みられてきた（岩本 2005）。近年は、高等学校社会科において 2022 年度から始まる新教科「公共」とも関連し、得た知識を社会で活用する力、学校で養う総合的な学力・能力、地域社会で自己を生かし他者と連携していく力、政治に興味・関心を持ち民主的な方法で主体的に関与していく力がシティズンシップ教育で期待されている。すなわち、様々な領域で行ってきた教育を、社会参加と政治参加の視点で捉えなおし、再構成して実践していくことが求められている状況にある（長沼 2019）。

2．SOHUM「アースミュージアム」プロジェクト 2021 年度報告

「アースミュージアム」プロジェクト授業では、環境・経済・社会のつながりやかかわり、地域や文化の価値を考えることを授業のねらいとして位置づけ、教育実践を展開してきた。特に、過度の商業的利益や経済的効率性追求といった点に対して批判的思考を持ち、一人一人が共に生きることができる公正な地球社会づくりへの具体的な参加について考え、行動する人を育てることを重要視している教育活動である。

2021年度のプロジェクト授業では、学内授業（人間学2）に加え、12月11日に、日本シティズンシップ教育学会 第2回大会（共催：東海大学教養学部・逗子フェアトレードタウンの会）（協力：逗子市・かながわ開発教育センター）（後援：神奈川県教育委員会・逗子市教育委員会・ASPUnivNet ユネスコスクール支援大学間ネットワーク）の運営にかかわった。大会は、シティズンシップ（市民性）を養う教育の発展を目的に、教育機関や企業、NPO 法人などが取り組む活

2021 年度　人間学２　シラバススケジュール
1．ガイダンス
2．フェアトレード・フェアトレードタウン
　・シティズンシップ教育入門
3．多文化共生って何だろう①
　－開発教育とシティズンシップ
4．流行に流されないって何だろう
　－総合芸術とシティズンシップ
5．わたしたちの『健康』のために音楽ができること
　って何だろう－芸術療法と シティズンシップ
6．フードロス問題の本質って何だろう
　－食とシティズンシップ
7．多文化共生って何だろう②
　－開発教育とシティズンシップ
8．国連 SDGs って何だろう
　－ESD とシティズンシップ
9．企画準備・打ち合わせ
10．（学外演習授業）企画運営①
11．（学外演習授業）企画運営②
12．（学外演習授業）企画運営③
13．（学外演習授業）企画運営③
14．ふりかえり／課題の提示

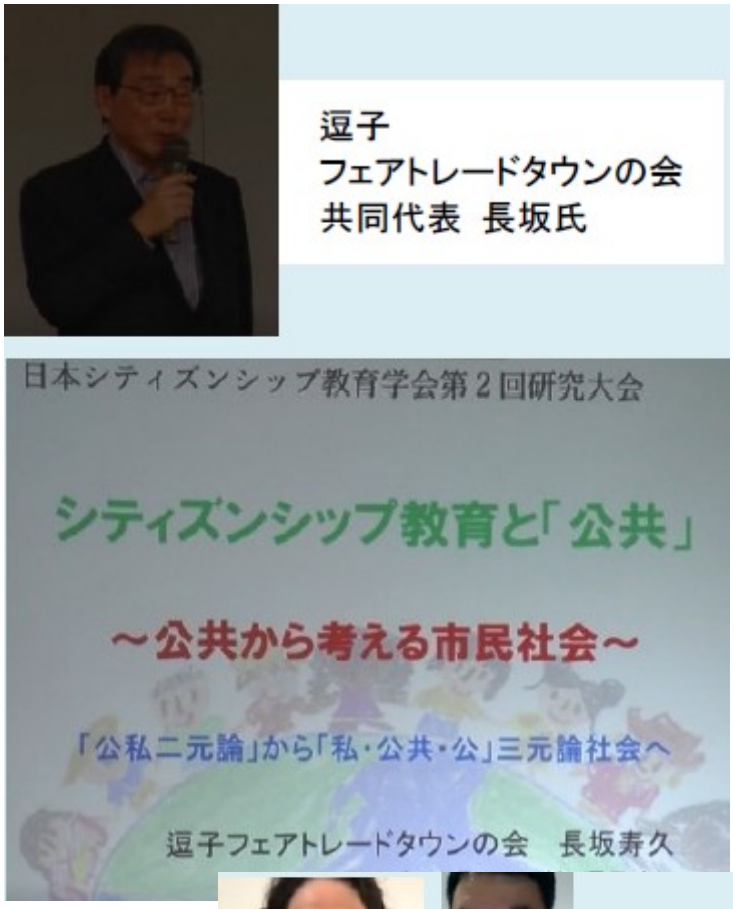
投稿日 2023 年 1 月 18 日　受理日 2023 年 1 月 25 日
＊所属　＊１：教養学部人間環境学科自然環境課程，＊２：教養学部芸術学科音楽学課程，＊３：教養学部国際学科，＊４：スチューデントアチーブメントセンター

動、研究成果を共有することを目的として開催される。人間学2履修学生と担当教員は、大会実行委員会を組織、実行委員して大会運営に参画した。

当日は、「持続可能な社会の担い手を育むシティズンシップ教育―今考えたい『公共』とは？」をテーマに、学会員による研究発表や公開シンポジウムを対面とオンライン配信のハイブリットで実施。公開シンポジウムでは、学会長の水山光春氏（京都橘大学）・協力主体である逗子市市民協働部次長 市民協働課課長の石井聡氏のあいさつとお話に続いて、逗子フェアトレードタウンの会共同代表（元拓殖大学教授）の長坂寿久氏の基調講演「シティズンシップ教育と「公共」～公共哲学から考える市民社会～公私二元論社会の日本の限界」を行っていただいた。

基調講演に続いて、国際的な繊維業界の非営利団体 Textile Exchange アジア地域アンバサダーで一般社団法人 M.S.I.の稲垣貢哉氏による話題提供「繊維産業からみた SDGs とフェアトレードの課題～シティズンシップ教育に期待すること」において、地域と繊維業界、若い世代の取り組みの紹介や今後の展望が語られた。また、インドの綿農家の有機農法への転換支援や農家の子どもたちの就学・復学・奨学支援を行っている一般財団法人 PBPCOTTON 葛西龍也氏と笠間一生氏によるオンライン対談企画も実施、具体的な取り組みの紹介からどのようなことが見え考えているか、話をしていただいた。

水山会長



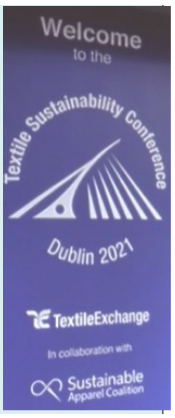
石井氏

稲垣氏

葛西氏 ・ 笠間氏

一般財団法人 PBPCOTTON 紹介

PEACE BY PEACE COTTON PROJECT とは、2008 年に株式会社フェリシモではじまった循環型のプロジェクトである。インド産のオーガニックコットンを使用した製品に基金を付けて販売し、その基金を活用してインドの綿農家の有機農法への転換支援と、農家のこどもたちの就学・復学・奨学支援を行っている。お気に入りのお洋服が、未来の地球の環境保全につながっている。サスティナブルな循環型社会を、着る人、売る人、作る人がみんなで 手をつないで実現していく、そんなビジョンを持ったプロジェクト団体である。



Textile Exchange と稲垣貢哉さん 紹介

テキスタイルエクスチェンジは、“Preferred Fiber” すなわち、この地球にとって好ましい繊維素材、および繊維素材業界でリーダーとなる人を生み出すために活動する、グローバルな非営利団体である。

稲垣氏は、これまで大手企業での 15 年間のコットン原材料の生産管理・バイヤーとして活動、その後そうした経験に基づく問題意識により、世界の児童労働をなくすために活動する認定 NPO 法人 ACE と共に、コットン原産地の村の脱児童労働化を促進する活動や、多くの農薬を使用する農業から有機農業への移行を促進するプロジェクト「PeaceIndiaCotton」を始めたり、2019 年に一般社団法人 M.S.I（Material Sustainable Institute）を設立したりして、日本市場への持続可能な繊維産業の普及促進に向けて世界中を飛び回っている。テキスタイルエクスチェンジでは、アジア地域バサダーとして活動、さらにテキスタイルエクスチェンジのミッションとビジョンを実現すべく、日本のユース世代とともに「やさしいせいふく」プロジェクトの創設に関わり、活動を展開している。

さらに、地域での取り組み紹介として、私立逗子開成高等学校教諭の村山哲也氏より「土曜講座 『逗子活性化プロジェクト』フェアトレードスクールをめざして」において実践の紹介、また逗子フェアトレードタウンの会共同代表で明治学院大学ボラティアセンターの磯野昌子氏より大学のボランティアサークルが制作したファッションショー動画の上映と取り組みの紹介をしていただいた。こうした取り組みの紹介から、とりわけプロジェクトベースの教育活動の可能性やシティズンシップ教育の意義等について、意見が交わされた。

村山氏

磯野氏

逗子フェアトレードタウンの会 紹介

地域ぐるみでフェアトレードを普及することを目的とした世界的なネットワークが「フェアトレードタウン」である。日本国内には、現在6自治体が認定されていて、逗子市は 2016 年に国内3番目のフェアトレードタウンとなった。逗子では、世界の現状やフェアトレードについて学ぶための講座、ファッションショー、映画祭などを企画したり、市と共催で「フェアトレードフォーラム」を開催したりしている。直近では、中米ニカラグアの国際フェアトレード認証を取得した豆を 100%使用「ZUSHI COFFEE」を発売している。

＊日本シティズンシップ教育学会とは

日本シティズンシップ教育学会は、2019 年 12 月 15 日に設立された教育学会である。

＜学会が目指すもの／理念＞

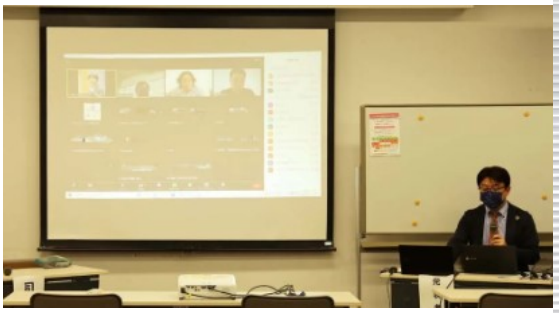
・シティズンシップ教育の研究

多義的で多様な意味や解釈を持っているシティズンシップ教育について、哲学，教育学，心理学，政治学，経済学，社会学，宗教学等の他分野の研究知見を集め、学際的，総合的な研究に取り組んでいく。

・ シティズンシップ教育実践への取り組み多様な研究者，実践者が得た知見を基にして、社会教育，生涯教育，

ボランティア教育，学校教育，国際理解教育，グローバル教育，比較教育，人権教育，ジェンダー教育，環境教育等の教育的研究や，学校教育の中での教科・領域に関する実践的研究に取り組んでいく。

・グローバル・イシューへの取り組み 18 歳選挙権導入にともなう主権者教育，グローバル化が進む国際社会における個々人の生き方の模索（キャリア形成）やグローバルなシティズンシップの育成、国際目標としての「持続可能な開発目標」SDGs の実現など，シティズンシップ教育をめぐる課題に教育の面から取り組んでいく。



３．シティズンシップ教育考

＜学生ふりかえりレポートから＞

本授業を通して、履修した学生（教養学部３年次生）からは以下のような感想、振り返りがあった。

「これからの持続可能な社会づくりに求められるシティズンシップ（市民性）とは、どのようなことか、またあなたはどのような行動をすることが大切だと考えたか」

◆ その地域の地盤となるようなシティズンシップを考え、足元の繋がりを紡いでいくことが大切ではないか。

◆ 世代に関係なく、ひとりひとりがそれぞれ他人事ではなく自分ごととして捉えることがシティズンシップで重要だと考えた。私はまず、この現状を知り、自分ごととして捉えることが一歩だと考える。環境や社会問題、人権問題に自分達の買い物がかかわっているということなど、さまざまなことを知ることで、自らが何をどう行動すればいいのか考え、それを行動することが大切だと考える。私自身、知ることで消費行動が変わってきたので、知ることから始めることは有効だと考える。

◆ 自分が行っている行動が、様々なことに繋がっているということが分かるように、たくさんの人と関わっていくことが求められると考える。PBPCOTTON のアプリを入れるなど小さいことからでも行動し、周りの人に伝えていくことが大切だと考えた。

◆ 身の回りで起きていることを自分事として考え、行動することが大切。またよりよい社会にしていくためにそれを考え、行動に移すことが大切だと考えた。

◆ これからの持続可能な社会づくりに求められるシティズンシップ（市民性）は、どれだけ地域や社会に関心を持ち、それをまわりの人と共有または批判的に議論し合えるかが求められていると考えた。

◆ 市民性とは、各々が自分事として責任感を持って積極的に取り組むことだと思うので、自分自身も今の日本社会の情勢などに興味を持ち、自分自身や未来の人々のためにより良い選択をしていけるよう努力したいと思った。

◆ 自分は、今の世の中の社会がどうなっているかもっと知る必要があると考えた。現状で私たちは社会への参加が足りないと思う。積極的に社会に参加し、課題解決に貢献する必要があると感じた。

「本授業の全体を通して振り返り、自分のこれからの生き方にどのようなヒントを得たか、またどのような社会参画をすることが大切か、具体的に考えたことはどのようなことか」

◆ 古着回収など自分が高校生(生徒会会長)時代にも取り組んでいたにも関わらず、それが持続可能性に繋がるものと考えることすらなかった。持続可能性とはどのようなことか、深く考えずにただ取り組んでいたからではないか、と考える。そのため、行動する意味をより前面に出し、SDGs が身近なものとなるよう、発信していくことが必要なのではないか。

◆ どのような問題でも、問題に対して深く考え、学会などで解決に向けて話し合っている人がいるということを忘れてはいけないなと改めて思った。実際のニュースを見て、どのようなことが課題となっているのか、理解しようとすることは大切だと思った。そして、理解したことを簡単な言葉で、かつ正確な情報を他の人に伝えていくことで、話し合いの機会につなげて、自分ごととして考えることができると思う。問題にかかわることは難しいことだという認識ではなく、誰でも気軽に自分事にすることは可能だ、ということを知ってもらうことが大切だと考える。

◆ 自分の行動ひとつひとつに責任を持つことが大切だと考えた。自分の買った安い洋服はどのように誰によって作られているかなど知らなかった。しかし、この授業を通して安いものには理由があることを知り、それによって苦しんでいる人もいるということを頭に入れなければいけない、と考えた。また、自分が良ければそれ以上のことは知らなくてもいい、というのは問題があり、もっと深いところにある問題の本質を知って行動してい

かなければならないと考えた。

◆ 今回の授業で、「自分事として考える」ということの大切さを改めて強く実感した。別な観点で、足元の地域にも関心を持ち、例えば地域のお祭りごとなどにも積極的に参加して盛り上げていこうと感じた。

◆ これから生き方として、ひとつの意見に縛られない生き方が重要だと考えた。現代社会では有名人やコメンテーターの考え方が正論化されているところがある。それは本当に正しいのか、11 歩下がった視点から見ることが大切だと考えた。

◆ 今回学会に参加させていただいたことで、当事者という意識を考えさせられた。今後は他の人の意見に流されてしまうのではなく、きちんとした情報を得る中ことで、自分で意思決定し、それを発信できるようにすることを大切にし、実際行動できるよう心がけたいと思った。

◆ 今回の授業を受けて、積極的に世の中を知る必要がある、と感じた。たしかに、私たち若い世代は、社会への参加が少ないのではないか、と考えさせられた。

以上のような振り返りから、シティズンシップ教育実践を通して、どのように世界とつながるのか、そして関連する世界や課題が自分とどのようにつながっているのか、把握することにつながるきっかけになった、と考える。このように、身近な問題が私たちの暮らしと密接に関わりのあるトピックを取り上げることで、市民としてどのように社会参画し、社会変容に向けて何を行動すべきか考えるきっかけを創出するのではないか。

4．おわりに

今回は、学会や繊維業界関係者、逗子市、逗子フェアトレードタウンの会関係者など、多様な立場や年代の方々の取り組みや考え方を知る貴重な機会となった。これからの市民社会を考え、行動し、変革するために、教育実践として継続して取り組まなければならない、ということが明らかになった。持続可能な社会の担い手となる多様な立場の市民、とりわけ若い世代の声は社会を動かす力になるので、さらに多様なステークホルダーが参加できる企画を検討していかなければならないのではないか、と考える。

5．謝辞

本実践は、2021 年度の東海大学教養学部教育研究補助金により実施された。関係各位に感謝申し上げる。また、逗子市関係者（市民協働課　石井氏）、逗子フェアトレードタウンの会、日本シティズンシップ教育学会、稲垣氏、葛西氏、笠間氏、長坂氏、磯野氏、村山氏、そして技術協力していただいた（株）エヌエルプラス　光浪氏・山本氏、本イベントにご協力・ご参加いただいたすべての皆様には、本プロジェクト実践に参加した学生の成長のきっかけとなる機会をいただいた。改めて、この場にて深くお礼を申し上げたい。

注

1） 本論では、日本シティズンシップ教育学会 HP を参照している。詳細は、以下 URL を参照。
https://jaced.jp/?page_id=17　（最終確認日 2023 年 1 月 15 日）

出典：

岩本 泰，20052005，イギリスにおける「市民教育」と持続可能性のための教育，教育と文化 4040，教育総研，pp.68-69

長沼 豊，20192019，現下の教育課題とシティズンシップ教育，社会を変える教育 Citizenship Education（長沼 豊・大久保正弘編）、キーステージ 2121，p.11